

## マリア様と共にふるさとへ

カレンガ神父

8月といえばお盆です。

毎年、お盆になると皆さんが故郷へ帰り、帰省ラッシュが起こりますが、都会生活の疲れを故郷で癒すために、また、普段はなかなかできない家族旅行をしようと、いろいろな目的をもって故郷へ帰省します。

故郷に帰ったときに、最初にすることはお墓参りです。

日本で生まれ、日本に住んでいる以上、日本民族として今までずっと続いてきた伝統・文化・風習が、DNAに組み込まれています。

お墓（お墓参り）を通して、先祖を崇拝する心が日本人のDNAには組み込まれているのです。

日本人ばかりではありません。

私の国でもまた、お墓と先祖を大切にしています。

私の故郷では、町に入る時と、出る時には必ず墓地を通らなければなりません。

家から畑に行く際にも、この墓地の真ん中にある通りを横切らないといけませんでした。

小さい頃、怖い思いをしながらこの通りを通っていたことを、今でも覚えています。

お墓はあまり楽しい場所ではありませんが、大切な場所です。

お墓は私と先祖を繋ぐ役目を果たしているからです。

結婚していれば、結婚した相手の先祖とも繋ぐ役目を果たしているのです。

同じお墓に入りたいという不純な動機で洗礼を受ける人もいますし、洗礼を受けて、教会の共同墓地や教会の墓地を希望する人もいます。

場合によっては、お墓のことで、家庭内不和になったり、家族が肉体的、精神的に苦しい状況におかれたりすることもあるのです。

キリスト教に入信した人が、キリスト教の精神に基づいてお墓参りしたら、ご先祖さまから「わたしには、その宗教は分かん！頼むから元に戻してくれないか？」と言われていたような気がして、恐れを感じる人さえいます。

ご先祖に喜ばれるために、近くて、すぐにお墓参りできる場所で立派なお墓を作ったらいいと私たちは考えがちですが、ご先祖様にしてみたら、子孫がお墓から遠くの地に住んでいても、ご先祖様に縁（ゆかり）の土地のお墓にお参りにきてほしい！と思っておられるのかもしれない。

そうだとしたら、お墓の問題というより縁のある土地（ふるさと）の問題だと分かります。

故郷は人とそのご先祖との出会いの場であると同時にすべての人をお造りになった神さまとの出会いの場でもあります。

その故郷は生まれたところであったり、受洗した教会、または所属する教会であったり、天国であったりします。

大急ぎで山里に出かけていったマリア様はエリサベトに出会い、エリサベトとご先祖と共に神に感謝

しました。

マリアさまの賛歌の歌（ルカ 1, 46-55）はこの時期に口にすべき単語を教えてください。

「私の魂は主をあがめ、私の霊は救い主である神を喜びたたえます（…）私の先祖におっしゃったように、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」。

要するに、生きている私たちと、私たちの後に生まれてくる私たちの子孫の霊と魂が喜ぶことは、ご先祖をも喜ばせるはずです。

ご先祖が喜ばれることは神さまをも喜ばせるはずです。

私の霊と魂が喜ぶのは、やはり時間とスペース。

ご先祖様も神さまも時間と空間がほしい。

故郷という空間に行く時間、祈りの空間にいる時間など。

ご先祖さまと神様は、私たちのできないことを要求したりはしないものです。

お墓参りできる環境にあるのに、お参りしないことにご先祖様は不満をもたれるのです。

教会に行く余裕があるのに、行かないということを神さまは喜ばれないのです。

また、お墓がなくても納骨堂などお参りできるところでご先祖さまに心を向けて感謝をすれば、祈りは通じ、ご先祖さまは喜ばれます。

教会にいけないときは、教会で祈っている人と心をつにして簡単な祈りをすれば、きっと神さまは喜んでくれるに違いありません。

時間と空間を作って、マリアさまと共に、教会と共に故郷である天国へと出かけてみてはいかがでしょうか。